

曲目解説

今回も各校顧問の選曲により、充実したプログラムが実現しました。演奏をお楽しみに！

プロヴァンス組曲

Suite Provençale

ヤン・ヴァンデルロースト

Jan Van der Roost (b.1956・ベルギー)

J.ヴァンデルローストは、母国のレマン音楽院で教授職を務める傍ら、優れた吹奏楽曲を多数発表している。難度の高い大作も書くが、比較的平易な親しみやすい曲も数多く手掛けている。優秀な指揮者としても知られており、日本のバンドでも客演指揮を務めるなど、日本に馴染み深い。4つの曲から成る「プロヴァンス組曲」は、フランス南部のプロヴァンス地方に伝わる古い民謡をもとにした作品である。中世の王室の雰囲気伝わる第1曲「天使が叫んだ」、哀愁に満ちた第2曲「アダムと連れ合い」、メロディが繰り返される第3曲「屋根拭き職人」を経て、軽快な行進曲風の第4曲「ほうき」へと続く。楽しいエンディングで終わりを迎える。

オクトーバー

October

エリック・ウイテカー

Eric Whitacre (b.1970・アメリカ)

E.ウイテカーはハリウッドで活躍する若手作曲家である。1990年代に発表された2つの大作「ゴーストレイン」、「ラスヴェガスを喰い尽くすゴジラ」がヒットして、ウイテカーの名前を吹奏楽界で一躍有名にした。多彩なジャンルの作品を手掛けているため、吹奏楽作品は決して多くないが、そろそろ新作が期待された2000年に発表されたのが、この「オクトーバー」である。それまでのウイテカーの作品は、いずれも難度が高く複雑なため、なかなか手が出なかったが、この作品は中学校合同バンドの委嘱作品であったため、それまでの作風とは一転して、流れるような美しいメロディを持ち、大変感動的な理解しやすい作品となった。オクトーバーとは、文字通り「10月」のこと。ちょっと季節外れの感もあるが、秋の雰囲気が伝わって来るだろうか。

吹奏楽のための組曲第2番

Second Suite In F for Military Band Op.28b

グスターフ・ホルスト

Gustav Holst (1874-1932・イギリス)

G.ホルストは管弦楽組曲「惑星」の作曲者として有名であり、歌劇、管弦楽、合唱など100曲近い作品を書いたが、実は吹奏楽にも強い関心を示し、数曲の素晴らしい作品を遺している。ホルストは、イギリスの伝統的な民謡や舞曲の研究を通して、これらの曲を自分の作品の中に取り入れることを考えた。1911年に作曲されたこの「第2組曲」は、まさにその影響を受けた作品と言えよう。速い活気のある第1曲「行進曲」、悲しげに美しく歌われる第2曲「無言歌」、打楽器を含む全合奏で鈺床の響きを現した第3曲「鍛冶屋の歌」を経て、第4曲「ダーガスの幻想曲」へと続く。数多くの民謡素材が使われており、第4曲では有名な「グリーンズリーブス」の旋律も聴こえて来るのだが、お気づきになるだろうか。明るく親しみやすい名曲である。

第5組曲

Fifth Suite (International Dances)

アルフレッド・リード

Alfred Reed (b.1921・アメリカ)

A.リードは吹奏楽界で最も有名な作曲家の1人であり、数多くの吹奏楽作品を手掛けている。すでに80歳という高齢ながら、今なお精力的に活躍を続けている。日本のバンドによる委嘱作品も多く、今回演奏する「第5組曲」も、1995年に「下関ウインドアンサンブル」の委嘱により作曲された作品である。「International Dances」の副題からも判るが、世界各地の舞曲を素材として、これらを全4曲の組曲にまとめた。第1曲「ホー・ダウン」は、アメリカのカウボーイの軽快な音楽、第2曲「サラバンド」はフランスの舞曲で、流れるような大変美しい旋律を持つ。第3曲「山伏神楽」は日本の神楽、第4曲「ホラ」は、ルーマニア、イスラエル付近に伝わる軽快な舞曲。世界各地に伝わる音楽を素材として吹奏楽作品に仕上げるといのは、リードの得意とする手法で、この作品もリードらしい響きを持っている。第4曲のクラリネット旋律は上級者でも結構苦労する、難度の高いものだが、いかに吹きこなすか注目して聴いてみよう！

マスク

Masque

フランシス・マクベス

W.Feancis McBeth (b.1933・アメリカ)

F.マクベスは長年に渡り作曲活動を続けている。この作品は1967年、アーカンソー州立大学の委嘱により、同大学に新しく建設された劇場開きのために作曲された。題名の"マスク"とは16~17世紀にかけて、特にイギリスで栄えた仮面劇のことであるが、情景描写的な音楽ではなく、新しいホールで上演される音楽や演劇、特に演劇の中で上演されるであろう仮面劇を想定して付けられた題名とのこと。古風な意味合いの題名に対して、曲は現代的な作風である。中間部には遅い部分も挟まれているが、全体を通して緊張感が失われることはない。マクベス作品の特徴とも言える重厚な和音構成は、この作品にも生きている。今なお根強い人気を有する作品。

ウエストポート序曲

Westport Overture

ジェームズ・バーンズ

James Bernes (b.1956・アメリカ)

J.バーンズは、カンザス大学で教授を務める傍ら、数多くの優れた吹奏楽作品を手掛けている。交響曲のような難度の高い大作も書くが、反面、比較的平易な親しみやすい作品も多数書いており、吹奏楽界で最も人気の高い作曲家の1人である。今回演奏する「ウエストポート序曲」も、そんな親しみやすい作品の1つである。バーンズの作品は中間部が美しく歌われるものが多く、その特徴はこの曲にも生かされている。決して難度の高い作品ではないが、このような作品をしっかりと仕上げるのは、難曲に挑戦する時とは、また違った面白さがあると言える。

ヴェスヴィアス

Vesvius

フランク・ティケリ

Frank Ticheli (b.1968・アメリカ)

F.ティケリに関しては、手元の資料では詳細なプロフィールは判らないのだが、数年前からアメリカを中心に人気が高まり、最近、日本でも注目され始めた若手作曲家である。これまでのティケリ作品は、複雑な現代曲風なものが多かったが、1999年に作曲されたこの作品は、中間部に美しい旋律を持ち、少し作風の異なる作品である。「ヴェスヴィアス」とは、イタリアにある火山(日本語ではベスピオ山と呼ばれる)で、西暦79年の大噴火により、その山麓に栄えていた古代都市ポンペイを壊滅させたことで知られている。この作品は、そのポンペイの最後の1日を描いたもので、情景描写的な音楽ではないようだが、これから起こる災難を予感させる前半部、ポンペイの文化の高さを感じさせる中間部、そしてベスピオ山の大噴火で都市が壊滅していく後半部と、その光景が見えてくるようである。素晴らしい作品なので、お楽しみ頂けるだろう。

March-Bou-Shu

(千葉県吹奏楽連盟創立45周年記念委嘱作品)

八木澤教司

Satoshi Yagisawa (b.1975・日本)

この作品は千葉県吹奏楽連盟創立45周年の記念作品として作曲され、千葉県の民謡「房州追分」が素材として使用されている。この民謡のモチーフは楽曲全体に縮小、拡大あるいは反行され、様々な語法で展開される。約3分半の時間の中に躍動的、かつ抒情的なドラマを感じることができるだろう。作曲者は作品を完成させるにあたり、吉田直先生と市川西高等学校吹奏楽部に協力を得たと、スコアに感謝の言葉を記している。

八木澤教司 (やぎさわ・さとし)

作曲家。市川市立真間小学校、市川市立第二中学校を経て、武蔵野音楽大学卒業、同大学院修士課程修了。近年より吹奏楽作品に力を注ぎ始め、その代表作として《ディメンタス》、《吹奏楽のための抒情詩 秋風の訴え》、《流浪の波》、《ピアノと吹奏楽のための協奏的組曲》などが挙げられる。又、音楽雑誌「The Flute」「The SAX」で執筆、編曲を担当する他、オーケストラ、室内楽、邦楽など多くの分野で活動を展開している。

<http://www.horae.dti.ne.jp/~yagisawa/home/>

船乗りと海の歌 (海の男達の歌)

Song of Sailor and Sea

ロバート・スミス

Robert W. Smith (b.1958・アメリカ)

R.W.スミスは、母校のトロイ州立大学のバンド・ディレクターを務めながら、多くの吹奏楽作品を手掛けている。その作品は、比較的簡単な技法で書かれながらも「格好良く」聴こえるものが多く、高い人気を有する。アメリカ海軍軍楽隊の委嘱で1996年に作曲されたこの作品は、海の力強い波や、海に立ち向かう、海の男達(つまり海軍)の魅力を讃えた曲で、前半部の「舟歌」、中間部の神秘的な「鯨の歌」、後半部の「ヤンキー・クリッパーの航海」という3つの部分から成り立っている。波の音を模した「オーシャンドラム」や、ティンパニーで鯨の歌を表現するなど、擬音楽器も有効に使用されているので注目して頂きたい。大変、人気の高い作品である。

ハンス・クリスチャン・アンデルセン組曲

Hans Christian Andersen Suite

ソーレン・ヒュルゴー

Søren Hyldegård (b.1963・デンマーク)

S.ヒュルゴーに関しては、詳細な経歴は不明だが、いくつかの優れた吹奏楽作品を手掛けているため、日本でも最近少しずつ知名度が上がっている。この作品は母国、デンマークの誇る偉大な童話詩人アンデルセンを題材にしたヒュルゴーの意欲作で、全6楽章から成る大作。

第1楽章は全体の導入部。アンデルセンの偉大さを表現している。第2楽章は旅行好きだったアンデルセンが、汽車に乗ってヨーロッパを旅する様子が表現されている。第3楽章～第6楽章は、アンデルセンの遺した詩や短編小説を題材としている。その原作をここで紹介するにはスペースが足りないので、興味のある方は、下の楽章タイトルを参考に、原作をお読みいただくと良いだろう。第3楽章は有名な「マッチ売りの少女」の悲しい音楽、第4楽章はエキゾチックな音楽、第5楽章は暗い雰囲気風の風変わりなワルツである。第6楽章は物語に沿って3つの展開を持つ曲だが、最後は力強く曲を閉じる。タイトルの「火打箱」は物語に登場するアイテムの1つ。この組曲は「ウインドオーケストラのための冒険」という副題を持ち、絵本のページをめくるような場面展開が魅力的な作品である。もしかしたら今夜、本棚の奥に眠っている、子供の頃に読んだアンデルセンの伝記を、もう1度読みたくなるかも知れませんね！。

第1楽章「序奏：偉大な詩人」

第2楽章「旅行するストーリーテラー：鉄道でヨーロッパを」

第3楽章「マッチ売りの少女」

第4楽章「コンスタンティノーブル：一詩人の市場」

第5楽章「ドリーム・ワルツ」

第6楽章「火打箱」(火口箱)